

はじめに

本校は、これから自分で考え、行動を選択し、置かれた状況に適切に対処できる能力を身につけた生徒（自立した学習者）を育てます。今後はこの目標に向かって教育活動を見直し、あらゆる場面で教師が教える学校から生徒が学ぶ学校へと変貌を遂げるべく、学校改善に取り組んでまいります。

学校教育目標の捉え方

学校教育目標がめざす具体的な姿は、時代とともに変化すると考えます。この学校は子どもたちのどんな姿をゴールとして教育活動をするのかを生徒および保護者・地域の皆様と共有することでより教育効果の高い学校を目指します。そのために、学校教育目標の当面の解釈として次の3点を本校が育成を目指す資質・能力とします。

「学びに向かう力 ・ 心身の健康を維持、増進する力 ・ 共生する力」

重点1 資質・能力の向上

① 学びの目標を明確化した指導と評価の一体化を図ります。

学校での学びには目標があります。その目標は、生きてはたらく知識や技能を身につけることです。生きてはたらく知識や技能とは、テストで点数をとれるだけでなく、それを実際の生活に生かすことができる力のことです。生徒がこうした知識や技能を身につけられるようにするためには、「指導と評価の一体化」が必要です。これは、授業で教えたとおりの問題をテストに出すことではありません。生徒の学びの現状分析を行うこと（＝評価）と、それに基づいて力を伸ばすために働きかけること（＝指導）を循環することで、生徒自身が自らの課題に気づき、学びを改善、調整して資質・能力を高めていくことをめざす取組です。

学校は、指導と評価の計画を立てて教育活動を進め、それを生徒や保護者の皆様と共有することで、生徒の資質・能力を高め、保護者の皆様からの理解と信頼を高めていただけることを目指します。

② 苫小牧市共通取組場面（見通す、決定する、協働する、振り返る）を確実に実践します。

この「共通取組場面」とは、授業の中に生徒が何ができればよいのかの見通しを持つ場面、どんな方法で解決するかを決める場面、課題解決に向かって仲間と協働する場面、何ができなかったかあるいはできなかったかを振り返る場面のいずれかを設定することとして苫小牧市教育委員会が推進している取組です。学校は、これらを確実に実践するために、「教える」指導観から「問いかける」指導観への転換を図り、生徒が自ら考え、試行錯誤しながら生きてはたらく知識や技能を身につけることを目指します。また、生徒にも「習う・覚える」から「考える・発揮する」へ学力観の転換をしてもらうため、思考とその結果の検証を求め、自らの学習の足跡を振り返ることができるよう指導と評価の工夫・改善を進めてまいります。

③ 生徒が自ら考え、実践し、改善する取組場面を設定することで自己存在感や自己有用感を高める生徒指導を展開します。

学校という人の集団には秩序が絶対に必要です。ただし、その秩序を大人から子どもに示したルールで維持させるのではなく、自分たちの生活をいかに維持・向上させるかを考え、実践し、振り返る自治的な活動場面を意図的に設定し、その中から自分たちの力で秩序を創出したという経験が重ねられる指導を展開します。

こうした指導は、生徒が自己存在感や自己有用感を高め、それが学校生活への意欲を高め、ひいては学力や道徳性の向上にもつながることを企図したものであり、多様な他者と共に変化に対応しながら社会生活を営むことができる主権者としての資質・能力を高めることも目指しています。当然のことながら、放任とは全く異なる考え方です。人間という存在にはエラーがつきものですが、エラーをゼロにするのではなく、起きたときにどう対処するかを大切な学習と捉えます。学校は、生命と人権の安全が確保された中で生徒たちに選択権と決定権を与え、エラーを管理しながら生徒に成果と課題の分析を求め、自ら改善を図れるよう支援する姿勢に転換してまいります。

〈補足：多様性を包摂する学校〉

新制服の導入を契機として性の多様性、障がいの有無から民族、信条等も含めて多様な他者と共に生きる倫理観を育てる学校をめざします。そのため、これまでの「学校の当たり前」を見直していきます。すなわち、ジェンダーに代表されるように、「〇〇は△△であるべき（でなければおかしい）」という発想を疑い、学習指導でも生徒指導でも多様性を尊重する指導を探求します。

ちなみに、「包摂」という言葉は、あまり馴染みがないかもしれません。区別も排除もせず、すべてを包み込むといった意味に捉えていただければよいと思います。例えば、「LGBTの理解促進」などと言われますが、これは性的少数者のことを理解するというだけにとどまり、多くの人には自分たちとは違う異質なものを見る感覚が残ります。これに対して「SOGI」という略称があります。これは Sexual Orientation（性的指向） Gender Identity（性自認）の頭文字で、「ソジ」または「ソギ」と読みます。どんな性を性愛の対象と感ずるか、自らの性をどのように捉えるかは人それぞれであるということを意味しており、性的少数者のみならず、すべての人を当事者として捉えようとする見方です。この例のように、異質なものを受け入れるという感覚から一歩進め、もともと皆違っている者同士が共生する感覚をもった生徒の育成に取り組んでまいります。

重点2 特別支援教育の充実

①ユニバーサルデザインの教育活動を推進し、すべての生徒の教育を受ける権利を保障します。

特別支援教育とは、障がいのある生徒に対して特別扱いをする教育ではありません。また、通常学級の生徒には必要のない教育でもありません。そもそも一人として同じ人間は存在しないのですから、すべての生徒に個別最適な学びを提供することこそ真の特別支援教育と捉えます。また、個々の能力や特性に応じた支援を行うより前に、誰でも参加できるよう学習活動のデザインを工夫します。登校した生徒が必ず何かの手応えをもって帰れる教育活動を目指します。

②すべての生徒に個別最適な学びを提供するための研修体制を整えます。

生徒一人一人にオーダーメイドのような学びを提供することは、教師にとって大変な作業であることに間違いありません。そこで、個別最適な学びをどのように実践していくかについて、教師も自ら学ぶ姿勢で研修に取り組める体制を整えます。

③個別の課題に対する適切な見立てと方策を立て、組織的な指導の評価と改善を行います。

学習や生活面で生徒が抱えている課題に対しては、客観的な事実から適切に見取り、それに基づいて課題克服のための方策を立て、その効果を検証し、改善策を学校組織として講じるサイクルを確立します。

重点3 生活・学習習慣の確立

①一人一台端末の持ち帰りを推進し、個に応じた家庭学習のあり方についての指導を行います。

一律の宿題を課したとしても、学力の伸長が期待できる生徒はかなり限定的となることが考えられます。また、与えられた宿題さえやっていたら勉強した気になってしまい、本当に必要な課題の克服につながらなくなることも懸念されます。

それぞれの学びを見取り、修正や補充のための課題を課すことで、必要性が認識される家庭学習の在り方の指導を行い、家庭での学びの見える化と個の学力伸長を目指します。自らの課題に気づき、どうすれば克服できるかの見通しを持つことができる個別最適化した家庭学習には、一人一台端末が大きな役割を果たすことが期待できます。

なお、部活動や習い事に忙しい生徒の生活実態にも目を向け、家庭学習だけが学力向上の条件ではないことにも留意しながら進めてまいります。

②苫小牧市教育委員会によるガイドラインに基づき、家庭とメディア利用についての共通理解を図ります。

健康維持の観点からは、メディアが及ぼす影響について啓発するとともに、時間の使い方について自ら振り返り、改善を試みる場面を設定します。

また、SNS等を通じた問題行動については、学校ができる指導には限界があります。最終的には保護者の責任に帰すこともあり、安全かつ健康的な利用に向けてご家庭と協働してまいります。

重点4 地域との連携・協働

①学校運営協議会を通じて、地域が育成を目指す具体的な子ども像を共有します。

コミュニティ・スクールは、地域と学校が相互に依存する仕組みではないと考えます。この地域の子はどんな子どもに育てているのか、そしてこれからどんな子どもを育てたいのかを地域の皆様と共有し、学校と地域が協働する体制づくりを目指します。

②教育活動の目標や意図を積極的に発信し、地域の教育力を最大限活用した教育活動を展開します。

学校はどんな資質・能力を育てようとしているのか、その背景は何かについて、あらゆる場面やツールを通じて発信し、地域と学校が共有した目標の実現に向けて地域の皆様と協働できる教育活動を展開します。

③社会に開かれた教育課程の実現に向けて、カリキュラム・マネジメントの充実を図ります。

将来の社会の担い手となっていく子どもたちを育てるための教育は、学校の中だけで完結できるものではなく、地域社会の中で行われなければなりません。ただしこれは、学校の教育活動のお手伝いをお願いするということではなく、この地域の住民でもある子どもたちをどう育てていくかについて地域の皆様と目標を共有した教育活動を計画し、協働して実践するということです（＝社会に開かれた教育課程）。

また、この地域が育成を目指す子ども像に迫るために必要な教育活動は何か、教科や行事をつなぎ、それを地域の行事等につなげます（＝カリキュラム・マネジメント）。これによって地域住民としての生徒、保護者を地域社会につなぐコミュニティ・スクールとしての役割を果たしてまいります。

重点5 教員の人材育成

①心理的安全性を高め、教職員が切磋琢磨して倫理観と使命感を高められる職場作りに取り組みます。

「心理的安全性」とは、他者から攻撃・排除される心配がないというだけではなく、誰もが意見や疑問を表明でき、必要な対立（＝議論）とその結論が受け入れられている状態を言います。こうした職場環境をつくり、一つ一つの教育活動の意義や目的をしっかりとをもってより高い教育効果を追求してまいります。

校長は、教職員に互いにプロフェッショナルとしての切磋琢磨を求め、自他の教育公務員としての倫理観と使命感を高め合って職務に精励するよう指導してまいります。

②生徒、教師個人、学校（地域）のニーズに的確に対応できる研修体制を整備し、ゴールのイメージを共有します。

生徒および学校（地域）の課題は、全国調査（学力・体力）のほか、学校評価やアンケート調査で把握します。こうしたさまざまなニーズを共有する場を校内研修の中に位置づけながら、今年度のゴールのイメージを共有した教職員の協働的な学びを展開することで、本校の教育力向上につなげていきます。

③校外の知見に触れて教職員が各自のスキルをアップデートできるよう、環境整備に努めます。

私たち教職員には、社会の変化に対応した学びが必要です。経験年数に関わらず、変化を敏感に感じ取り、主体的かつ継続的に新たな知見に触れて自らのスキルをアップデートすることは、生徒の成長を大きくするためには欠かせません。教職員の研修は、長期休業以外にも行われますので、保護者並びに地域の皆様におかれましては、ご理解をお願いいたします。

重点6 働き方改革の推進

①見立て、手立て、ゴール（目標）を明確にした合理的な教育活動、校務運営を推進します。

学校における働き方改革の目的は、単純に労働時間を短縮することではなく、生徒と向き合う時間を確保して教育の質を向上させることです。しかしながら、目的実現のために教職員がひたすら長時間勤務をすることは、健康を害し、ひいては学校教育の推進という本務を全うできない事態になってしまいます。このことから、学校は教職員が働ける時間を何にどれだけ使うかを見極める働き方の改革に取り組むことが必要なのです。

そこで、正確な情報収集に基づいて現状分析（見立て）をし、明確になった課題を解決するまでの方策を立てます。そして、いつまでにどのような状態を目指すのか（ゴール）を明確にした検証・改善サイクルを確立することで、限られた時間の中で教育効果を高めていくことを目指します。

加えて、教職員の時間を有効に使えるようにするための条件として、校務運営組織の在り方、会議の持ち方についても抜本的に見直してまいります。

②校務のデジタル化を推進します。

校内においては、教職員間の情報交換などにおいてデジタル化が進み、会議のペーパーレス化が図られております。このような小さな合理化がやがて大きな成果につながっていくように、まだ手作業で行っている校務についてもデジタル化を進めてまいります。

すでにさくら連絡網での出欠連絡等で保護者の皆様にもご協力いただいておりますが、学校からの情報発信等についても順次ホームページを利用するなどデジタル化を図ってまいりますのでご理解とご協力をお願いいたします。

③部活動の地域移行を着実に推進します。

苫小牧市では、令和 10 年度までに部活動を地域の活動に移行することを目指しています。将来像としては、他校と合同するような活動から地域の活動として続けていく活動までさまざまな形態が想定されており、これには地域や保護者の皆様のご協力が不可欠です。今後は、学校としての説明責任を果たすとともに、P.T.Aや学校運営協議会等を通じて広く理解と協力を求め、この地域の子どもたちの健全な育ちを保障できる環境を構築してまいります。

教職員も部活動の指導者という立場から支援者の一人という立場への転換を図ってまいります。